

貸与行動における向社会的判断と愛他的判断

江口知子 社会福祉法人 花工房 エコーファミリー

安里勝人 信州大学大学院教育学研究科

川島一夫 教育科学講座

【要約】

発達心理学における、愛他行動と向社会的行動は、その社会的価値に基づく行動的側面を目的とする(愛他的であるかどうか)動機的側面からの違いによって、曖昧な定義が行われることが多かった。そこで、本研究では、この問題について明確にするために、幼児・児童の貸与行動をとりあげ、そこで行われる返却を期待するか否かという判断の違いによって両者の違いを明らかにすることを目的とした。一般に向社会的行動とは①外的な報酬を期待しない、②他者のためになる行動であると定義され、一方、愛他行動は、人間が生得的にもっている愛他性の含むものと定義されることが多い。しかし、行動的な側面から考えると、その社会において“良し”とされる行動であるならば返報を期待したとしても向社会的といえるであろう。また、愛他的というならば、他者からの返報は期待することはないであろう。そこで本研究では返報を期待する条件と期待しない条件を設定し、その違いについての検討を行った。その結果、児童期以降と比較して幼児期において、返報が期待される条件で多くの貸与を行う傾向が見られた。

【問題】

川島・広田(1993)は、それまで行われてきた研究が向社会的行動 (Prosocial behavior)と愛他行動(Altruistic behavior)を曖昧なまま使用している点について以下のような点を指摘している。それは①現象としての向社会的行動と愛他行動が類似しているにも関わらず、研究者によって用語の使用の仕方が異なっていること、②用語間の関連を相対的に議論している研究者が少ないこと、③それらの用語の混乱によって、この研究分野での発展が妨害される可能性が生ずる、の3点であった。

向社会的行動の定義について、川島(1991)は「困窮者の利益を意図し、援助の意思決定の自由がある場合になされる行動」と定義づけている。しかし、愛他行動と比較した時、向社会的行動は、その人が生活している社会集団の中で価値があるとされる行動に向けられたときに使われるべきであると考えられる。実際、1980年代までは、愛他行動と向社会的行動の両者の違いは曖昧なまま使用されてきた。その後、次第に動機の不明確な援助、分与他の意図的、自発的な行動を含むことを明らかにするために向社会的行動という用語が用いられるようになってきた(Eisenberg,1982)。

愛他行動と向社会的行動の違いについてこれまでの定義を概観すると、基本的に①外的な報酬を期待しない、②他者のためになる、という2点であろう(Midralsky & Bryan 他,1972)。さらに、Bar-Tal, Ravive & Leiser (1980)は、③自発的・意図的な行動という点を、また、Krebs (1970)は、④自分の利益を犠牲にすること、を主張している。一方、わが国では、高野(1982)が、①外的な報酬を期待することなしに、②他者の福祉や利益のために行動しようとする心を愛他心と定義し、人間が生得的にもっている愛他性の存在を強調している。また川島(1991)

は、高野が述べた愛他心の定義を前提とした上で、「外的報酬なしに他者を満足させることを目的とした行動」とし、他者の欲求の満足を重視した記述を行っている。これまでの多くの定義では、援助者側の視点から「他者のためになる」という意図が強調された。川島の定義は他者の欲求の満足を目的とすることを重視しており、自己の行動の結末を他者の視点からみることすなわち援助した際の相手の反応について予測を必要とする点で他の定義とは異なっているといえる。以上のように、いくつかの定義を総合して考えると、向社会的な意図を含んでいるかどうかを別の問題としたときに、「他者の福祉に動機づけられている行動」は愛他行動であるとして、向社会的行動から区別することができると考えている。そこで、愛他行動とは、①外的な報酬を期待せず、②他者のためになり(他者を満足させるために)、③自発的・意図的になされ、④自己犠牲を伴う行動である、ということができる。これは、Eisenberg, Cameron, Tryon, & Dodez (1981) が指摘するように、偶然に他者のためになった場合や自分の利益を追求する結果から他者の福祉にもなった場合は愛他的とは言わないとされている。一方、向社会的行動は動機に関わらず、他者のためになるとされる行動であり、操作的な定義のもとで寄付、分与、援助行動が含まれると考えられている。(平井・浜崎, 1985)。

松崎・浜崎(1990)は最近の向社会的行動研究の展望を行っている。そこでは研究されている分野を中心にし、向社会的行動(prosocial behavior)、愛他的行動(altruistic behavior)、援助行動(helping)の関係が次のように述べられている。社会心理学分野では、援助行動が多く使用され、向社会的行動は発達心理学分野、愛他的行動が社会・発達両心理学分野で多く扱われているとしている。社会心理学分野で援助行動という用語が多く用いられることについては、援助行動という用語が人助け全般という広い意味合いをもつものであり、また、現実の疑似場面において援助を求める実験設定を多く用いるという方法論にも依拠しているからであるとしている。それに対して、発達心理学分野での研究ではどちらかといえば、寄付や分与を求めることが多く、狭義の意味での援助を求めることは少ないためであると考えられているとしている。

また松崎・浜崎(1990)は、向社会的行動と愛他的行動との関係については、Eisenberg (1982) の記述を引用している。Eisenberg (1982) が行った両者の整理は、以下のようなものである。まず、彼女は、その行動の動機にかかわらず他者の利益となる行動をポジティブ行動とし、その行動の意図と動機の点から両者を区別しようとした。すなわち、愛他的行動は、このポジティブ行動の精選された下位行動として捉え、他者の利益のために外的報酬を期待することなくなされた意図的かつ自発的行動であるとしている。一方、向社会的行動は、その行動の動機は不明であるにしても表面上意図的で自発的なポジティブ行動であるとしている。やはり愛他的行動が向社会的行動の中でも高次の動機にもとづく行動である、としている。

一方、援助行動(helping)という用語は社会心理学分野において多く使用されているが、愛他行動や向社会的行動の一つの下位行動であると捉える立場と、より広い意味で行動主義的に人助け全般を指す立場とがある。上述の三語は、わが国の研究の中でも同様の傾向をもって使用されていると考えてよいが、それらの訳語については必ずしも一貫しているわけではない。Helping behavior は援助行動と訳されて問題なく使用されているが、altruism は愛他性・愛他主義・利他主義などの訳語で使用され、prosocial behavior は向社会的行動・順社会的行動などの訳語で使用されている。

愛他行動、向社会的行動、援助行動に関する定義は数多くなされている。Eisenberg (1982) は、定義が完全なコンセンサスを達成できない理由として、定義の内容が向社会的性および愛他性の本質(例えば人間観、発達観、社会観など)といった価値を含むものであること、およびそれゆえに、操作的定義に留まらず、概念的、理論

的要素を含まざるを得ないからであるとしている。

そこで、本研究はまず、向社会的行動と愛他行動は動機の点から明らかに異なる、という立場に立ち、両者を区別して考える。すなわち、前述のように、向社会的行動とは「動機に関わらず、他者のためになるとされる行動」である。このことは、川島(1991)でも指摘されているように、社会関係でのより適切な行動について、あるいは社会をより良い方向に進めるという意味において用いられるものである。一方、愛他行動とは「外的な報酬を期待せず、他者のためになり(他者を満足させるために)、自発的・意図的になされ、自己犠牲を伴う行動」である。このように、実際的な現象としての向社会的行動と愛他行動は類似しているわけであるが、前述の川島・広田(1993)の指摘にもあったように、向社会的行動と愛他行動の関連を相対的に議論している研究は少ないのが実状である。

そこで、本研究においては、向社会的な貸与行動条件設定と愛他的な援助行動条件設定のもとでは、それぞれの行動判断率がどのように変化するかについて、幼児・児童を対象に横断的に検討することが目的とされた。また、従来の向社会的行動研究の大半では、一貫した性差については見出されていない。性差がみられる場合には、女子の方がわずかに多い傾向にあるという結果である。しかし向社会的反応についてははっきりした一貫性のある性差を示す研究はみられない。そこで本研究における第二の目的として、向社会的な条件設定のもとでも、愛他的な条件設定のもとでも、これまで言われてきたように一貫した性差は見出されないのかどうかについて検討を行う。

なお、貸与行動と援助行動を取り上げた理由については、これらの行動は日常場面で起こりうる頻度が高く、また実際に被験者自身も遭遇しやすい行動であると考えたからである。従来の向社会的行動研究において取り上げられてきた行動は、分与行動(sharing behavior)や寄付行動(donating)が中心であった(広田, 1995)。なお、高木(1982)によると、分与行動とは「他者に自分の貴重なものを分け与える行動」であるとされる。さらに寄付行動とは「他者のために自分のお金などの貴重なものを寄付したり、提供したりする行動」であるとされる。この種の行動には、向社会的行動の中でも比較的統制がとりやすく、行動の遂行が量的に示されやすいという利点に関連しているがゆえに、従来の向社会的行動研究において中心的に取り上げられてきたのであろうと考えることができる。

【目的】

広田(1995)によれば、従来の向社会的行動研究において取り上げられてきた行動は、分与行動(sharing behavior)や寄付行動(donating)が中心的であったとされる。分与行動とは「他者に自分の貴重なものを分け与える行動」であり、また、寄付行動とは「他者のために自分のお金などの貴重なものを寄付したり、提供したりする行動」である(高木, 1982)。この種の行動には、向社会的行動の中でも比較的統制がとりやすく、行動の遂行が量的に示されやすい。それゆえに従来の向社会的行動研究において中心的に取り上げられてきたのであろうと考えることができる。

しかし実際の日常場面においては、他者にもものを分け与えたり、寄付あるいは提供するといった行動ばかりではなく、他者に自分の持ち物“貸与する”といった行動も行われている。従来の向社会的行動研究においては、寄付行動や分与行動が中心的に取り上げられてきており、貸与行動における研究はあまり取り上げられていない。

そこで本研究においては、特に貸与行動を「他者に自分の持ち物を貸し与える行動」と定義し、貸与行動について検討を行うこととする。前述してきたように、向社会的行動と愛他行動の違いを明確に提示した。しかし、向社会的行動と愛他行動の関連を相対的に議論している研究は少ない(川島・広田, 1993)という指摘がある。そこで、本章においては、貸与行動を取り上げ、向社会的な条件設定と愛他的な条件設定のもとでは、それぞれの行動判断においてどのように変化するかを、幼児・児童を対象に横断的に検討することを目的とする。

本研究においては貸与行動における向社会的であると考えられる条件として、他者に自分のクレヨンを貸しても元の姿の状態に戻ってくるであろうという、返却期待を伴う条件(以下、返却期待あり条件と記す)を設定した。愛他的な条件としては、他者に自分のクレヨンを貸しても壊されたりなくされたりして元の姿の状態に戻ってくるかは不明であるという、返却期待を伴わない条件(以下、返却期待なし条件と記す)を設定した。本研究で以下の結果が予想される。

①返却期待あり条件においては、貸与することに対するコストは小さいことが期待されるため、貸与する幼児・児童においても判断がたやすいことから、学年差は見られないであろう。

②返却期待なし条件においては、自分のクレヨンが壊されたりなくされたりしてしまうという自己犠牲を伴うために幼児・児童が知覚するであろう心理的コストは大きくなることが予想される。ゆえに、社会的経験が少ない幼児よりも社会的経験が豊富な児童の方が貸与率は高くなり、学年差が見られるであろう。

③返却期待あり条件と返却期待なし条件の貸与率を比較すると、返却への期待が異なることから、返却期待あり条件と比べて返却期待なし条件においては貸与率の低下が見られるであろう。

【方法】

被験児

返却期待あり条件:H幼稚園に在籍する年少児40名(男児17名, 女児23名), 年中児35名(男児20名, 女児15名), 年長児54名(男児29名, 女児25名), およびN小学校に在籍する2年生37名(男児20名, 女児17名), 4年生34名(男児17名, 女児17名)の, 計200名(男児103名, 女児97名)が実験に参加した。

返却期待なし条件:H幼稚園に在籍する年少児39名(男児16名, 女児23名), 年中児33名(男児19名, 女児14名), 年長児52名(男児29名, 女児23名), およびN小学校に在籍する2年生34名(男児19名, 女児15名), 4年生33名(男児17名, 女児16名)の, 計191名(男児100名, 女児91名)が, 実験に参加した。

実験計画

4×2の要因配置法が用いられた。第一要因は年齢であり、年少児, 年中児, 年長児および2年生, 4年生の5群が用いられた。第二の要因は性差であり、男児, 女児の2群である。

実験用具

返却期待を伴う(返却期待あり条件)例話と、返却期待を伴わない(返却期待なし条件)例話が作成された。また、例話の内容を表した線画を示し、具体的な場面が想起されやすいように配慮した。線画は例話の進行に合わせて一場面ずつ3枚作成された。主人公の性別によって判断に影響が与えられないように、男児用には男子の主人公が、女児用には女子の主人公が登場する例話が用意された。

返却期待あり条件で使用された例話

<1枚目> 今日はみんなでクレヨンを使って、お絵描きをしています。○○(君/ちゃん)も(○○は被験児の

名前), とっても楽しく絵を描いているところです。

<2枚目> そこへ、同じクラスのいちろう君(はなこちゃん)が、〇〇(君/ちゃん)の所にやって来ました。いちろう君(はなこちゃん)は、〇〇(君/ちゃん)に、「クレヨンを忘れて、お絵描きできなくて、とっても困っているの。僕にも(私にも), 〇〇(君/ちゃん)の使っていないクレヨン貸して!」と言ってきました。

<3枚目> いちろう君(はなこちゃん)は、いつも物を大切にしてお友だちです。だから、お友だちに借りた物を壊してしまったり、なくしてしまうようなことはしません。〇〇(君/ちゃん)が、いちろう君(はなこちゃん)にクレヨンを貸してあげても、いちろう君(はなこちゃん)は、きちんと返してくれるでしょう。いちろう君(はなこちゃん)は、お絵描きができなくて、とっても困っています。

返却期待なし条件

<1枚目> 今日みんなでクレヨンを使って、お絵描きをしています。〇〇(君/ちゃん)も(〇〇は被験児の名前), とっても楽しく絵を描いているところです。

<2枚目> そこへ、同じクラスのけんた君(ともみちゃん)が、〇〇(君/ちゃん)の所にやって来ました。けんた君(ともみちゃん)は、〇〇(君/ちゃん)に、「クレヨンを忘れて、お絵描きできなくて、とっても困っているの。僕にも(私にも), 〇〇(君/ちゃん)の使っていないクレヨン貸して!」と言ってきました。

<3枚目> けんた君(ともみちゃん)は、いつも物を大切にしないお友だちです。だから、お友だちに借りた物を壊してしまったり、なくしてしまったりするのです。〇〇(君/ちゃん)が、けんた君(ともみちゃん)にクレヨンを貸してあげても、けんた君(ともみちゃん)は、きちんと返してくれるかわかりません。けんた君(ともみちゃん)は、お絵描きができなくて、とっても困っています。

手続き

幼稚園における実験は個別に行われた。一人ずつ、部屋にある机の前の椅子に着席してもらい、氏名、年齢などを確認した後に、次のような教示が与えられた。「これから〇〇(君/ちゃん)に(〇〇は被験児名), お話を読みます。このお話には、〇〇(君/ちゃん)も出てきます。お話の終わりに、〇〇(君/ちゃん)に聞きたいことがあるので、今から始まるお話をよく聞いたり見たりして下さい。いいですか。では、始めます。」。例話の進行に従って、線画による紙芝居が一枚ずつ提示された。例話を読み終えた時点で、返却期待あり条件のもとでは「〇〇(君/ちゃん)だったら、いちろう君(はなこちゃん)に、クレヨンを貸してあげますか?それとも貸してあげませんか?」という質問を行った。また、返却期待なし条件では「〇〇(君/ちゃん)だったら、けんた君(ともみちゃん)に、クレヨンを貸してあげますか?それとも貸してあげませんか?」という質問を行なわれた。さらに両条件において「どうしてそういうふうに思ったのかな、お話できたら教えて下さい。」という質問を行い、その動機となる判断理由を求めた。反応が理解しにくいものであれば、適宜質問の繰り返しを試みた。なお、質問に対する回答は、実験者が記録用紙に記述した。

小学校2年生、4年生に対しては、同じ内容の例話、線画、質問を含む質問紙を作成し、実験者が読み上げることにより、クラスごとに集団で実施された。幼稚園児に対する教示の他に「このお話はみなさんの成績とは全く関係がないので、担任の先生が見ることはありません。みなさんの思った通りに自由に書いて下さい。」という教示が付け加えられた。社会的望ましさを考慮し、回答は無記名方式で行い、また、成績とは無関係であるということが強調された。

【結果】

返却期待あり条件において、自分のクレヨンを他者に「貸してあげる」と回答した者を「1」とし、また、自分のクレヨン他者に「貸してあげない」と回答した者を「0」として得点化した。Table 1 は、返却期待あり条件における、「貸してあげる」と回答した子どもの人数の年齢的变化を男女別に表したものである。

返却期待あり条件における貸与率について角変換を行い、得られた角変換値に基づく2要因の分散分析を行った。その結果が、Table 2 である。ここでは、学年および性別の主効果、交互作用の全てにおいて有意な差は見られなかった。次に、返却期待なし条件においても同様に得点化を行った。Table 3 は、返却期待なし条件において、自分のクレヨン「貸してあげる」と回答した子どもの人数の年齢的变化を男女別に表したものである。

Table 1 返却期待あり条件において「貸してあげる」と回答した児童の割合

単位:%	年少児	年中児	年長児	2年生	4年生
男児	94.1	95.0	100.0	100.0	100.0
女児	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

Table 2 返却期待あり条件における分散分析表

変動因	平方和SS	Df	χ^2	P
(A) 学年	109.508	4	2.565	n.s.
(B) 性差	72.792	1	1.705	n.s.
交互作用	109.517	4	2.565	n.s.
計(全群間)	291.817	9	6.836	n.s.

$$\sigma^2 \omega = 42.69$$

Table 3 返却期待なし条件において「貸してあげる」と回答した児童の割合

単位:%	年少児	年中児	年長児	2年生	4年生
男児	68.8	84.2	48.3	47.4	76.5
女児	95.7	78.6	39.1	73.3	87.5

返却期待なし条件における貸与率について角変換値に基づく2要因の分散分析を行った結果が Table 4 である。ここでは、学年の主効果において有意な差が見られた($\chi^2=22.060$, $df=4$, $P<.001$)。また性別においては有意な傾向にあることが示された($\chi^2=2.761$, $df=1$, $P<.10$)。交互作用では有意な差は見られなかった。学年において有意な差が見られたことから学年間ごとに検定を行ったところ、年少児と年長児の間において($\chi^2=17.428$, $df=1$, $P<.001$)、年少児と2年生の間において($\chi^2=5.409$, $df=1$, $P<.05$)、年中児と年長児の間において($\chi^2=12.243$, $df=1$, $P<.001$)、年長児と4年生の間において($\chi^2=13.832$, $df=1$, $P<.001$)、および2年生と4年生の間において($\chi^2=3.940$, $df=1$, $P<.05$)有意な差が見られた。

返却期待あり条件と返却期待なし条件における比較を行った。Table 5 は、返却期待あり条件と返却期待なし条件において「貸してあげる」と回答した児童のパーセンテージを男女別に示したものである。返却期待あり条件と返却期待なし条件の比較における貸与率について角変換を行い、それに基づいて2要因の分散分析を行っ

た。その結果が、Table 6 である。そこでは、条件の主効果において有意な差が見られた($\chi^2=108.533$, $df=1$, $P<.001$)。また性別の主効果においても有意な差が見られた($\chi^2=6.225$, $df=1$, $P<.05$)。なお交互作用においては有意な差は見られなかった。さらに条件間において有意な差が見られたことから、各学年ごとについて検定を行った。その結果、年少児($\chi^2=5.954$, $df=1$, $P<.05$)、年中児($\chi^2=7.810$, $df=1$, $P<.01$)、年長児($\chi^2=75.594$, $df=1$, $P<.001$)、2年生($\chi^2=32.153$, $df=1$, $P<.001$)、および4年生($\chi^2=12.589$, $df=1$, $P<.001$)の全学年において、返却期待あり条件と返却期待なし条件の間には有意な差があることが示された。

Table 4 返却期待なし条件における分散分析表

変動因	平方和SS	Df	χ^2	P
(A) 学年	979.457	4	22.060	<.001
(B) 性差	122.570	1	2.761	<.10
交互作用	301.43	4	6.789	n.s.
計(全群間)	1403.457	9	31.609	<.001

$$\sigma^2\omega=44.40$$

Table 5 返却期待あり条件と返却期待なし条件における比較

単位:%	返却期待あり条件	返却期待なし条件
男児	98.1	63.0
女児	100.0	73.6

Table 6 返却期待あり条件と返却期待なし条件の比較における分散分析表

変動因	平方和SS	Df	χ^2	P
(A) 条件	913.853	1	108.533	<.001
(B) 性差	52.418	1	6.225	<.05
交互作用	0.475	1	0.056	n.s.
計(全群間)	966.746	3	114.815	<.001

$$\sigma^2\omega=8.42$$

【考察】

返却期待あり条件に関する貸与率については、学年、性差、交互作用の全てにおいて有意な差は見られなかった。また Fig.1 から見られるように、年少児からすでに多くの子ども達が自分のクレヨンを「貸してあげる」と回答していることが明らかになった。このことから、仮説①は支持されたといえよう。すなわち、自分のクレヨンを他者に貸しても元の姿の状態で返ってくるであろうという返却期待を伴う場合の貸与行動においては、自己犠牲が知覚されないために、心理的コストが小さくて済むと考えられる。このような場合、本研究で対象とした幼児のような年齢の者であっても、向社会的な判断を行うことが可能であることが示唆された。

また、返却期待なし条件に関する貸与率についての検討から、学年間において1%水準で有意な差が見られた。しかし、各学年間において有意な差が明らかになったのは、年長児、2年生と他学年間においてであり、仮説②で示したような、幼児よりも児童において貸与率が高くなるであろうという結果は明らかとならなかった。こ

のことから、仮説②は支持されなかったといえるであろう。さらに判断理由に着目すると、年少児・年中児においては、「クレヨンを貸してと言っているから」といったような、他者の要求に焦点を当て、自分のクレヨンを「貸してあげる」と回答した被験児が多かった。これは年少児および年中児における貸与率の高かった理由として見ることが出来る。一方、年長児・2年生においては、「自分のクレヨンが折られるといやだ」といったような自己中心的で快楽主義的な自己利得に基づいて貸与判断を下した者が多かった。このことが年長児・2年生における貸与率の低下としてあらわれたといえるであろう。これらの結果から、本研究においては年中児から2年生にかけて、最も利己的な貸与判断を行う傾向が見られるといえであろう。

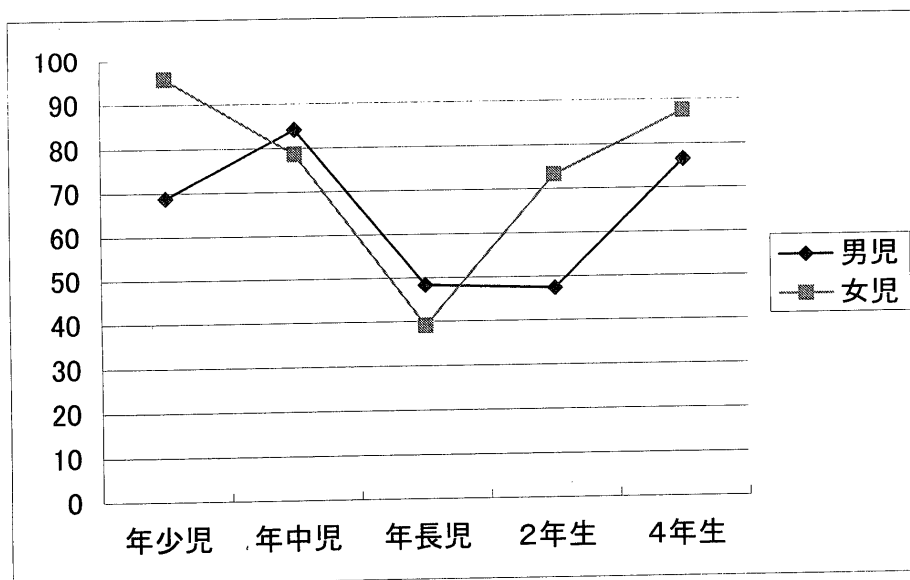


Fig1 返却期待あり条件において「貸してあげる」と回答した児童の割合

また、Fig1 を見ても明らかのように、年中児までは比較的高かった貸与率が、年長になると、判断率は男女ともに急激に減少している。そして、2年生、4年生と学年が上昇するに従い、再び貸与率が増加する傾向にあることが明らかになった。すなわち、年齢を横軸としたとき全体的にU字型の年齢的变化を描いているといえる。これは川島(1990)の実験結果で得られた結果と同様であった。川島は、幼児、2年生、4年生、6年生を被験者として寄付行動を行ったところ、U字型の年齢的变化が見られた。それについて川島は、U字型の年齢的变化の現象が見られるのは、寄付行動のように緊急度が低く、児童にとって自分の得たものを他者にあげなければならないというような心理的コストが大きい愛他行動において見られるという可能性を指摘している。本研究で検討された愛他的な貸与行動とは、自分のクレヨン他者に貸しても、壊されたりなくされたりして元の姿の状態に戻ってくるかは不明であるという返却期待を伴わないものであった。この愛他的な貸与行動は、自己犠牲が十分に知覚される場合に高くなると思われることから心理的コストが大きく、寄付行動と同様の側面を含んでいると考えられる。このことから、本研究で得られたU字型の年齢的变化と、川島の研究で明らかにされたU型の年齢的变化の現象は、一致する現象を示していると解釈できるであろう。その点について、川島は行動的側面を取り上げて検討を行っているのに対して、本研究では認知的な貸与判断を検討している。にもかかわらず、川島(1990)と同様のU字型の年齢的变化が見られたことは、本研究で使用された例話が妥当なものであったといえるであろう。

返却期待あり条件と返却期待なし条件において両者の比較を行った結果、返却期待あり条件においては高

かった貸与率が、返却期待なし条件では低く、全年令において統計的にも有意な差が見られた。このことから、仮説③は支持されたと言えよう。すなわち、心理的コストが小さな向社会的な判断としての返却期待なし条件においては年少児のような低年齢な時期から行う可能性があるにもかかわらず、自己犠牲を伴うような心理的コストが大きい愛他的な判断となると、その判断率は低下するということが明らかになったといえる。

本研究においては、返却期待あり条件と返却期待なし条件における比較において性差が見られた。すなわち、男児よりも女児の方が、より愛他的な判断を行うことが示唆された。しかしTable. 5 で明らかのように、年中児・年長児では男女とも差が見られず、2年生では貸与率が男女で著しく異なり、4年生になると男児の貸与率が女児の貸与率に近づいてくるという傾向が見られた。つまり、愛他的な判断は、男児と女児では、その発達過程に差があると解釈できるであろう。このことについて、中里(1985)は、ゲーム事態における囚人のジレンマ事態テストによって愛他行動を測定し、男児と女児とでは愛他行動の発達過程に差があると結論づけている。本研究においても、女児の愛他的判断は、2年生で一時的に男児よりも多くなり、男児は、女児に2年くらい遅れて女児と同様になることが示唆された。このことから、貸与行動における愛他的判断においても、男児と女児とでは、その発達過程に差があるものと解釈することが可能であろう。

【引用文献】

- Bar-Tal, D., Raviv, A., & Leiser, T. 1980, The development of altruistic behavior: Empirical evidence. *Developmental Psychology*, 16, 516-524.
- Eisenberg, N. 1987, The relation of altruism and other moral behaviors to moral cognition: Methodological and conceptual issues. In N. Eisenberg (Ed), *Contemporary topics in developmental psychology*. New York: John Wiley & Sons.
- マッセン P・アイゼンバーグ=バーグ N 菊池章夫(訳) 1980 思いやりの発達心理 金子書房
- アイゼンバーグ N. 二宮克美 首藤純元 宗谷比佐子(共訳) 1995, 思いやりのある子どもたち: 向社会的行動の発達心理 北大路書房 (Eisenberg, N. 1992, *The Caring Child* New York: Harvard University Press.)
- 広田言一 川島 夫 1995 愛他行動決定に関する検討I 信州大学 教育学部要 83, 71-81.
- 岩立京子 1995 幼児・児童における向社会的行動の動機づけ: 帰属要因と感情要因の検討 風間書房
- 川島 夫 1991 愛他行動における認知機能の役割とその情景要因と個人内要因の検討 風間書房
- Midarsky, E., & Bryan, J.H. 1972, Affect expression and children's imitative altruism. *Journal of Experimental Research on Personality*, 6, 195-203.
- Midarsky, E., & Bryan, J.H. 1972, Affect expression and children's imitative altruism. *Journal of Experimental Research on Personality*, 6, 195-203.
- 高木修 1982 順社会的行動のクラスターと行動特性 年報社会心理学 23, 137-156.
- 高野善純 1982 愛他心の発達心理学: 思いやりと共感を育てる 有斐閣

(2002年12月16日 受理)